

平成22年度研究計画案

1 研究主題

分かり合う力を育む体育学習

—運動を通しての仲間づくりのあり方—

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す。また、グローバル化も一層進んでいる。このような社会情勢を受け、教育基本法が改正されて新たに教育の目標等が定められた。それに伴い、学校教育法も一部改正された。ここで子ども達に求められている学力は、「生きる力」であり、その育成によって培われていくものと考えられる。

平成20年度に文部科学省が行った全国体力・運動能力、運動習慣調査（全国体力テスト）では、男女ともに多くの種目において昭和60年度の平均値を下回っており、子どもの体力は低下傾向を示し続けている。生活環境や生活習慣との関連で子どもの運動に対する好き嫌い、体力の高低等について、二極化現象が生じている。週に3日以上、運動やスポーツを実施している児童は男子では、60.1%、女子では36.6%であり、休日に運動やスポーツをしない理由として「他に興味があることをしている」「運動やスポーツをしたいと思わない」「時間がない」と回答している割合が多く、子ども自身に運動に対する興味が薄れていることが伺える。

2003年に行われたPISA（Programme for International Student Assessment：OECD＝経済協力開発機構が実施し、41か国が参加する生徒の学習到達度調査）の結果で指摘された読解力の低下や17年度のスクールミーティング（文部科学省）、教育課程実施状況調査（国立教育政策研究所）等から見ると、「子どもたちの間で、自分の感じていることをうまく表現できないことからのトラブルがよく見られ、コミュニケーション力の乏しさが、子どもたちの人間関係を難しいものになっている。

また、本校の教育目標の3つの柱は思いやりのある子、自ら学び考える子、たくましい子の育成をすることである。これらの徳・知・体の要素を含め、人と関わりながら、わかり合おうとする姿勢を育成していく教育を一層進める必要性がある。

(2) 児童の実態から

本校の児童は明るく素直な子ども達が多く、地域や学校の特色から身近な人々と関わる機会が多い。そのため、児童は教師や地域の方々に対して、ごく自然に接することができる。そして、大人に言われたこと（指示されたこと）は、しっかりと行動でき、国語や算数等の学力も比較的優れている傾向がある。一方で、失敗を恐れずに自ら進んで挑戦したり、目の前の対象や課題に対して深く関わったりする力が不足していると感じることもある。また、自分の意見や良さを上手に表現できずに、友達と軋轢を生じることがあり、発達段階相当の集団としての行動できないこともある。

こうした傾向から、特に自分のよさに気づくことができ自信をつけること、また、積極的に人とかわりながら、ともに課題に向かっていける「仲間づくり」の育成が必要であると考えられる。

(3) 体育学習の特色から

体育学習では、児童が自分のめあてをもち、めあてに向かって粘り強く最後まで取り組み、理解できたことや上達したこと、遊びや運動ができるようになったことでの満足感・充実感・達成感を味わうことで、自信が生まれる。さらに、きまりを守ることや協力し合うこと自他を認め合うなどの集団活動を通して、仲間同士のやりとりの中から社会性を育て、人間形成の土台を作っていくことができる。特に体育科の運動領域から見ると、低・中学年のゲーム領域や高学年のボール領域、走・跳の運動遊び、走・跳の運動、陸上運動の一部では、グループ対抗の活動を取り入れることが可能であり、望ましい仲間づくりを行うには効果的な教材を設定することができると思う。

以上、3つの観点から、「体育科を通しての仲間づくり」を研究のテーマと考えた。「生きる力」につながる生涯スポーツとなり得るものの基礎を身につけられるように、仲間とともに夢中になって取り組むための学習方法や場を工夫していくことが必要である。また、体育学習における体力や技能向上は仲間と共に学習していく過程で自然と身につけていくと考えられる。従って、子どもの視点は、技能向上やチームの勝利を目指すことに行く。その活動を通して発生した問題を手立てを打って解決していくことにより子ども達の仲間作りを支援していくことが狙いである。以上。人とかかわりながらわかり合おうとする姿勢や精神的なたくましさを身につけた子どもを育てていく必要性があると考え、本主題を設定した。

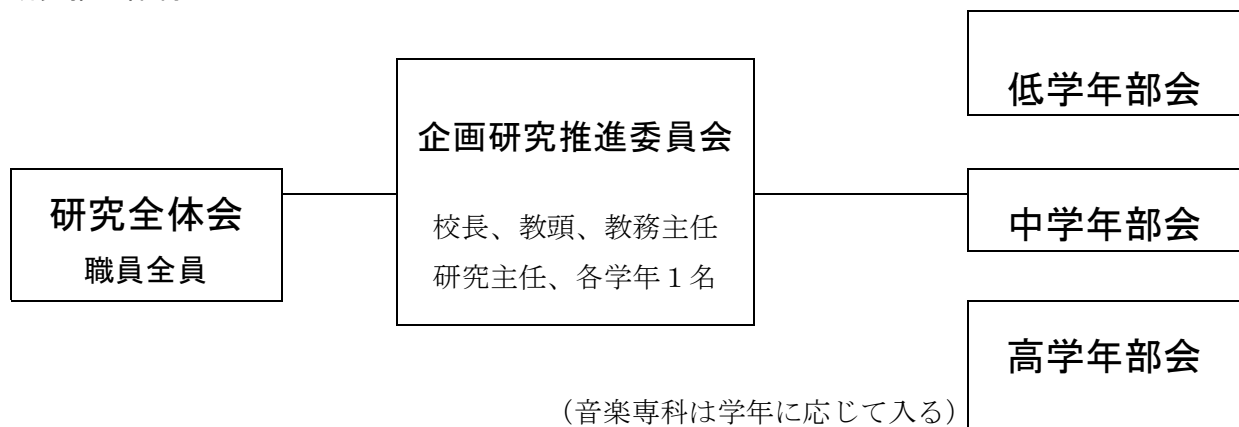
3 研究の目標

体育科におけるゲーム領域、ボール領域、走・跳の運動遊び、走・跳の運動、陸上運動等の運動領域を中心に、「仲間づくり」のあり方について明らかにする。

4 研究の方法と内容

- ①秋津小学校の児童の実態把握と子どもの発達の段階に応じためざす子どもの姿を示す。
- ②主題に迫るための学習の教材化についての検討。
- ③実技研による、教材化や運動の特性、指導方法等の教材研究について共通理解する。
- ④年間3回の授業研究を通して、望ましい仲間づくりに迫る手立てを明らかにしていく。

5 研究推進体制



6 講師

(1) 全体講師：未定

(2) 学年講師

低学年：千葉市立本町小学校長 嶋田信昭先生

中学年：千葉市立高洲第二小学校長 小川達也先生

高学年：習志野市教育委員会指導主事 天田正弘先生

7 主な研究日程

期	月	日	曜	形態	内 容	備 考
1 学 期	4	7	水	企画研究	研究計画案検討	15学級懇談会
		12	火	全体	研究計画提案	15パートナー会議 21,28 学区探査
		26	月	企画研究	1学期の研究について	24 30周年記念式典
	5	6	木	全体	研究のねらいについて共通理解	18 4年施設見学
			13	木		実技研修（体育授業の基礎基本）講師：校長 年間の見通し
		20	木	全体・部会	めざす子ども像と迫るための手立て	20パートナー会議
		27	木	全体		22 運動会
				学年・部会	学年の年間計画検討	23 運動会予備日
		31	月	企画研究	授業研究について（授業の見方・指導案形式）	
	6	10	木		指導案作成 ※6月は授業研究部会1名	17パートナー会議
			17	木	学年・部会	教材研究，指導案検討
		24	木		授業研究（実態把握）【部会1人】	20 日曜参観
		28	月	企画研究	夏休みの研究について	6/30-7/2 6年鹿野山
	7	1	木	学年	1学期の研究のまとめ	2 市内小中音楽会 15パートナー会議
			学年・部会	1学期の授業のまとめ ※部会で行う 10月の授業研究の教材研究・指導案作成 10月の授業研究の指導案検討 ※夏季休業中、部会ごとに2回設ける。 実技研修 集団行動、体づくり、ボール、陸上等	19パートナー会議	
2 学 期	9	1	水	企画研究	2学期の研究について	16パートナー会議
		2	木			27 合同訪問
		9	木		合同訪問へ向けての準備期間	
		16	木			
		28	火	企画研究	授業研究について（授業の見方・部会の持ち方）	
	30	木	学年・部会	10月の授業研究の教材研究・授業準備		
	10	7	木	学年・部会	教材研究 ※10月は授業研究	5-6 6年修学旅行
14		木		指導案検討	8 1年生校外学習	

	21	木		授業準備	10 秋津まつり	
	28	木		授業研究（成果の実践）【学年1人】	15 2年校外学習 18-20 4年鹿野山SS 21パートナー会議 22 3年校外学習 29 5年校外学習	
11	1	月	企画研究	研究のまとめ・校内発表会について	6 土曜参観・懇談会	
	4	木	学年・部会	研究のまとめ	17 市内ボール大会	
	11	木		・各学年の成果と課題	18ボール大会予備日	
	18	木		・「めざす子ども像」「年間計画」見直し	18パートナー会議	
	25	木	全体	校内発表会	19市特別支援教育振興大会	
	29	月	企画研究	研究協議会について		
12	2	木	学年・部会	教材研究	3マラソン大会	
	9	木		研究協議会の授業の指導案検討 授業準備	6 マラソン大会予備日 16パートナー会議	
3 学 期	1	7	金	企画研究	研究協議会について・紀要作成	20パートナー会議
		13	木	全体	研究協議会準備	26 6年校外学習
		20	木	学年・部会		28市幼小中学校音楽教育研究大会
		31	月	企画研究		
2	3	木	学年・部会	研究協議会準備	17パートナー会議	
	8	火	校内研究協議会 授業研究【部会1人】		21-23 5年鹿野山SS	
	24	月	企画研究	次年度研究計画		
3	3	木	全体	次年度研究計画		

※必要に応じて適時、実技研修を行う。